

上演 7

2024年8月1日2校目
関東ブロック

千葉県立松戸高等学校

「私達の、小さな物語。」

第48回全国高等学校総合文化祭
第70回全国高等学校演劇大会

講評文

生徒講評委員会 担当委員

香川県立善通寺第一高等学校

白川美妃

私たちは今まで当たり前前に教育実習生は必ず教師になるものだと思っていたが、劇中では各々が実習後にそれぞれの道へ進む姿が描かれていた。教育実習生は生徒と先生の間には置かれている存在であり、生徒の問題を解決したいと思ってもそれ以上、干渉できないジレンマを抱えている。また、高校生も子供と大人の間で社会情勢についてきちんと捉えられていない距離感が表されていた。

ウルトラマンに憧れ、理想としていたにも関わらず、現実とのギャップを突きつけられながらも夢に向かって突き進む田中と過去に囚われていたが教育実習という経験によって、進みたい道を決められた塚本。教師を目指した理由は違ったけれど、それぞれが仕事に対して真摯に向き合う姿勢に感銘を受け、思わず応援したくなった。

進路について、将来の夢が決まっても本当にそれでいいのか、本当にやりたいことは何なのか、などの悩みに共感し、モヤモヤした。しかし、やりたいことが分からず、なんとなくの選択をしたとしてもやり直せる、様々な経験によって未来が広がるということに気づき希望をもらった。

場面転換がモノローグのようで常に舞台から目が離せなかった。黒板がプロジェクターになったり、向日葵の絵になったり、窓のようになったり、シーンごとに様々な使われ方をしていた。そこから飛び出したとき、怪獣でさえもヒーローのように見えて彼らの勇気を目の当たりにして、こちらまで勇気づけられた。特に最後の田中が飛び出したときはシルエットが浮かび、胸が高鳴った。

いまだに戦争もいじめもなくなっていない。この劇は単に自分探しだけがテーマでなく、現実の社会情勢の残酷さもテーマであると考えた。未来は私たち若者にかかっており、どうすればより良い未来をつくれるのかを考えずにはいられない作品だった。

